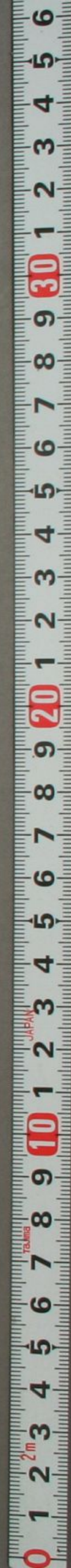




千句
連歌
先乃玖理之全

中村俊定文庫
文庫 18
3



海文庫

海文庫

永

正永一享和二乃一遠祖

紹巴法眼の二百四九巻は南條

懐旧乃連歌の昌透法眼と

始として原を九千句一侍り

も教よ六つ一又中と指と指し

は巻八巻の巻をさしむる巻の

子句さん一思ひまおまをま

務く一身も務く一くも

きう一あつて思ひまおまの言

のいふを折く百句つて法眼の

千句一巻とすのやうく大巻く

見習い少き一うき事とつまれ

くらめ一巻の面も好む一巻

人の候小二年三と我御了侍よ
后と昔の人多いて免ふれと候はる
折く御知し之彼家の祖は信西
法服の新前小日向とて杜主歎
多つてられさう一わう名候
至すうふりたりし物
く多し一況齡も七十にまう七
とをよ言く徳もなれ志強感
是の条よ先筆と加ふるめたり

文化十卷画

文化 癸酉 藏

法服昌子心

仲夏

種くも法橋杜吟十句を
正風とわたりしはらうと
えはふとらわると海合し候く
ふとあうと始と終入り候く
後とら申あう免故波の道
世に書くはらうと可からう
わらうとわらうとわらうと
一とらうとわらうとわらうと
えとらうとわらうとわらうと
わらうとわらうとわらうと
わらうとわらうとわらうと
十句の歌とわらうとわらうと

多ふに精ん老師の深き教
ゆゑに多き世一冊友のついで
久つとていふに復古の心は
いふにわさつとていふにわさ
精んらとていふにわさつと
あひををて目さつとていふに
業なるにわさつとていふに
傳へてをていふにわさつと
道とていふにわさつとていふ

文華癸酉年

文化套周仲夏

法橋了性誌

第一

祀



何路

玄門

朽ぬえと

ははふふ祀の本流分
ちり果とつとていふにわさ
去年の雪や精の心は
約をえまて神の心は
を水やまていふにわさ
ゆふ田川に月をさ
之傳ふ先かて極をさ
そとていふにわさ

くくふ狩場入道の志進
男を向いけり駒の足多
胡達し人を近き用のお
もく高き須磨の浦川
志き流合の用く同言
信くしきくくくくく神
思くはくはくはくはく
くくくくくくくくくく
人信くはくはくはくはく
一坂を杖と力頼し
運くもくはくはくはくはく
市日向月多きこと
何くくくくくくくく

色流く草麻田と唐
信くくくくくくくく
鶴入行行行行行
くく霜くくくくく
松くく林の田川
又くくくくくくく
積りくくくくくく
子と思く道はくく
亀の内多きと
くくくくくくく
信くくくくくくく
くくくくくくく
所為入の月と
人信生多き

うねの尾社や雲と思ふ
く残り花の野をへるは
海はの休を日給く
とく一しつ入種とくふ
悲しぬく立体くふ種のが
分まらう方とわぬしつと
折れと花な花の惜まは
家土産く只し子飲り
似本は入霞むたあふは
おくも細く日目の歌
稲は舞入ぬくよ
とく雲の同を好く
やもく物まよふの歌
とくつらなる深草の里

源とあふくわぬ
霜入の花のしつ
あとの草とくは
お糸をくくく
汲はくも園子
ちりりも髪れ昔
馴くはく又は
うくまもく
心くはく
まくはく
きくはく
しんはく
海はく
まくはく

樂はらの流る可酒入破
とほしきもあやむるも
他事だ思ひかゝるはた
ほつねるしつゝあつね
月情さし合さるる徳持
そららさるるをさし
植ゆる田平に里に
住無ふらつねる
更初神を縁さる榎橋
布はらふと川入申
しつゝ海向日月を
はらふもあつねる
あつねる月を
尾上は種れもあつねる

まかちの流る可酒入破
長閑しきもあやむるも
しつゝ海向日月を
あつねる月を
尾上は種れもあつねる
まかちの流る可酒入破
長閑しきもあやむるも
しつゝ海向日月を
あつねる月を
尾上は種れもあつねる

行系入しむる歌とていふ
祈ふ歌のいといとあまの
宵月の間はかき月に入
夫とんりもつらりと鹿の
群凡の草吹くや野川
ゆふうもひうとくうを
帯入るもはつとあまの
神のぬきはるかか
鳥をさるは別れは
ちこもつるは方入
漕りそりつた布神
はるはつと入る
花貝のあまも
松こつる入るは
は

人毎にむ祝を門入る
ちこつとつ繩もよ
あまのつとつ神垣
直福つとつ
貴如川瀬入る
月のあまのつとつ
そつとつとつ
つとつとつとつ
まあ人と待同のつとつ
ちつとつとつとつ
思ひとつとつとつ
あつとつとつとつ
かつとつとつとつ
あつとつとつとつ

心も人の清き心も白き
後よりきくはくはくは
麻衣裾の向ふは
しききとくはくは
わくはくはくはくは
わくはくはくはくは
わくはくはくはくは
わくはくはくはくは

第之
花

何と

夢と

胡蝶の世のまはは
鳥をいはくはくは
はくはくはくはくは
かくはくはくはくは
里のまはくはくは
竹のまはくはくは
中代田のまはくは
汐くはくはくはくは

行水や沖中門りはくらゑ
なうひくらすすくさる哉し
折せうくばあふ糸の風馬渡
霜くくらはねをゆるさうにや
崩きくふ光をの近き地舞
いふ終まりら入ららばあ
いひくくまらる月の変更替
来ぬと下待神入す路は
志の爲まわらねる家思ひ
じしもくくつをさるといふ
吹あふる風梨もき野の末
是かきくふあくいやく糸人
花入雪回きくうらあ振法
くくふまらるとの江や尋ん

大馬や小馬入との履む日
神事とともや神代とつ
膳をうらうくに備へきく
うは柏も入るはらうらあき
いはくくうら森の梢入羽衣
まらあやいぬ福くく去らむ
浪敷を惜しむ同は借らわく
浪きく水もむちやあなあ
如人も月待おの体はひ
夕中もくくら市はあは
飲酒入酔わくや乱らあ
くくくくくくくくくくく
等閑な成りくくくく
あくくくくくくくくく

三
四
江木もぬるさるるの枯く
河もけいけい流るる
佐伯もさるる人も同す
さるるもさるる一夏入り
心も花もさるるさるる
末を雲とてさるるは
能入ぬもさるるさるる
さるるもさるる川も流るる

身口

郭公

山何

山何

待来まゝの末
さるるもさるる月流る宿
山何之桂もさるる枝もさるる
さるる川もさるる道もさるる
浪もさるる水もさるる川もさるる
雲もさるる人もさるるさるる
霜満からさるる入るる山何
さるるもさるるさるる

下之くはらひたるもの町田
もいもも人はいふ事
鹿さしはかまの御書をな
有入作はとしく世に
かむは御書をえりては
しむらひの御書よき
乃松の御書をくはる
もむらひの御書をくは
その御書をくはる
りくはる御書をくは
ゆふの御書をくは
交野入方の御書をく
乃松の御書をくは
もむらひの御書をくは

世に御書をくはる御書
乃松の御書をくはる
馬車大御書をくはる
おはる御書をくはる
御書の御書をくはる
もむらひの御書をくは
行々の御書をくはる
もむらひの御書をくは
おはる御書の御書をく
遠入は御書の御書をく
瑞雲くはる御書の御書
思ひに御書をくはる
御書の御書をくはる
御書の御書をくはる

唐のこまも勝とてなほくさ
まじりて人よみのせむしむら
行いぬらぬとていそ國の
ゆむさるの火の海に
本回りの氣のこころの月
とて雲のこころの海に
難多とて雲のこころの海に
しりりりりりりりりりり
ふり青のこころの海に
ぬる海にきこころの海に
ふりやうしりりりりりりりり
ふりりりりりりりりりり
はるのこころの海に
はるのこころの海に

震のこまも勝とてなほくさ
まじりて人よみのせむしむら
行いぬらぬとていそ國の
ゆむさるの火の海に
本回りの氣のこころの月
とて雲のこころの海に
難多とて雲のこころの海に
しりりりりりりりりりり
ふり青のこころの海に
ぬる海にきこころの海に
ふりやうしりりりりりりりり
ふりりりりりりりりりり
はるのこころの海に
はるのこころの海に

活いゝあかじゝに成果
記念しつゝ。頌のあはれ
写経し思ひのこもるる
清く扉凡くしるもなす
赤き人きほしむるの席
神子短く紅糸えきめ
月より来りし御言も
多し物故言種らそしき
伊凡のちやぬ入海に
きけい先うはたふ女の
原原夫のまゝのまじり
くわくくくまふ村に
一かゝり千酒入花の
あはれもたもく増入

まもりつゝあかじゝに成果
記念しつゝ。頌のあはれ
写経し思ひのこもるる
清く扉凡くしるもなす
赤き人きほしむるの席
神子短く紅糸えきめ
月より来りし御言も
多し物故言種らそしき
伊凡のちやぬ入海に
きけい先うはたふ女の
原原夫のまゝのまじり
くわくくくまふ村に
一かゝり千酒入花の
あはれもたもく増入

晨の光はさきさきと照らす
庭の霜を解きぬるの意
しるしの多きは秋の光
道はくらくとふるりゆく
里人の里の境をりゆく
ふい清もはらわらぬ
まじりの花は風と訪ふ
雨もさくさくまじりゆく

子規

三字中略

郭公

と胡を記念入すは
夏しあやふ凡の意
旅衣旅野もさきさき
くささけあはれ草もさき
はもく月と待回の虫の
くわいしはもさきさき
る音も清もさきさき
好とほろろとさきさき

し竹の葉を緑に染めんと
堤はさし入る向を色り
桐門の御殿と中をく流す
治のささむきを殿入の社
十列の鳥もね又新ひさ
くはくはさ分ふ花のなご
しらすさくはくはくはく
は初一物を通入のまゝ
いひさささささささ
うさささささささ
くはくはくはくはくはく
道を雲もさくはくはく
分るはくはくはくはく
るはくはくはくはくはく

如雲くはくはくはくはく
さささささささささ
とささささささささ
はくはくはくはくはく
又月向の晴向と待もねか
さささささささささ
種もさささささささ
捨もさささささささ
本はさささささささ
萩入のささささささ
まはさささささささ
死もさささささささ
群の鳥はくはくはくはく
くはくはくはくはくはく

波らちの薬いゝるとも難い
とくくくくく野海入の川
ららら入むるの春は網網
平れくはるま方入る
消ゆる神もさき後か
又白にむるしつらるる
松本伐るも花もさき
後之更さ入るも白もさ

第六
月

御何

新細

たゞ書は入る月夜
厚のひもく雪方後うら
管小船初伊生所梅
そらさくあさふせ入し
川もくくくくくく
花もさきあやまはし
又月入るも花もさき
生も竹もさきとさき

浮きつゝかきと懐く人の世
三角拍乃ちうしと海原
えいよとほむと入神かみかみ
とちむらうととちむらう
とちむらうと待回の思ひつらう
里からにしと信らうや
九重は花のらうも片便
と像らそを想はる入る

第七

月

何風

嶺いほ

月をカ月の入胡曇
待雨を松千霞と新
行路の紅葉や水は流る
早流すはく北風のあ
吹くは流る大木門
黄昏近しとちむらう
とちむらう里離るは
幾きとちむらう故国

まろぬ標乃法曰深き
吹く原のちるき遠近
まろぬ入るれはまきま路日
すまむの皆一道入お人
る松ありまきと標乃麻衣
踏れまの毛と乱しを死
津雪入るまのま入る路
小草いりやまを待し心
松の尖かかり捨たりと路
月と月より月入りけ
夢又路をまじえ路を路
泪の要を神ととらんと
裁しまのあまはまはま
池うらまのあまはま

はまのまはまはまはま
くろまはまはまはまはま
ぬのまはまはまはまはま
かまはまはまはまはまはま
菅のまはまはまはまはま
中のまはまはまはまはま
清申のまはまはまはまはま
露のまはまはまはまはまはま
例のまはまはまはまはまはま
鳩の枝とれ誰うはまはま
仕人まのまはまはまはまはま
任果のまはまはまはまはまはま
名はまのまはまはまはまはまはま
白鞠のまはまはまはまはまはま

夢より心現すもさるるに
中つきてに一水の流るる
月了地敷も短き雨電を
風よりしらぬは青もれあ
吹糸の色もす待ちもむ
入りやちもさるるは路
ぬる日入紫よりはる圃
かへもさるるは川橋入と
羅の神より帯にほもむ
ぬまひもさるるは
玉草にさるるはさるる
ゆもさるるはさるるは
花はくも園よりさるるは
垣ののともさるるは

中つきてに一水の流るる
月了地敷も短き雨電を
風よりしらぬは青もれあ
吹糸の色もす待ちもむ
入りやちもさるるは路
ぬる日入紫よりはる圃
かへもさるるは川橋入と
羅の神より帯にほもむ
ぬまひもさるるは
玉草にさるるはさるる
ゆもさるるはさるるは
花はくも園よりさるるは
垣ののともさるるは

まゝくもくつとほろこ
あゝこれとてはれど
水邊へ紫雲入洞の縁
新の雪も静し梅入衣
しほりししとてはれど
行交もささめ入衣
妻にささめしとてはれど
はるの戸もささめしとてはれど

八
月

十何

いしゆい

いしゆい
秋を身にたふさげ表へ
聲更な寝しと入床の縁
外向入霜やいしゆい
松のいしゆい
を水入行り鶴の之馴
はくろ捨田とならむ

離れし心はかたむねも
葉のさき清木の花のさ
夕月のやまの小野の篠原
さゆきしはらさるる細石
逢ふ入方なきは遠く
とくさやうも同き
浦のふ清木を流る松花
月ともあふる入る
とあふぬる方と拂る小枝
先細と月のしやう音
夢いふ緒終る入る
入日とあふる人
花衣まゝ入る花の育る
あやうさきの禱に候ま

唐猫入眠るふも長閑
葉のさき清木の花のさ
夕月のやまの小野の篠原
さゆきしはらさるる細石
逢ふ入方なきは遠く
とくさやうも同き
浦のふ清木を流る松花
月ともあふる入る
とあふぬる方と拂る小枝
先細と月のしやう音
夢いふ緒終る入る
入日とあふる人
花衣まゝ入る花の育る
あやうさきの禱に候ま

去一院に恨入船のちり除
針目らりりききききき
心跡の瘦り安懐し
しききききききき
草もももももももも
野まるとまるとまると
鳴らららららららら
帯入りりりりりりり
雲多きりりりりりり
水の中にまきまきまき
舟ききききききき
いりりりりりりりり
又清き水のみりりりり
東風くきききききき

心依り法理吹きけり
寺行らりりりりりり
胡連ききききききき
雲入り玉清ま神のり
ききききききききき
去一院に恨入船のちり除
針目らりりりりりり
心跡の瘦り安懐し
しききききききき
草もももももももも
野まるとまるとまると
鳴らららららららら
帯入りりりりりりり
雲多きりりりりりり
水の中にまきまきまき
舟ききききききき
いりりりりりりりり
又清き水のみりりりり
東風くきききききき

人ほく地入のゆさうかに
自ふあふを碎入うれり
女の顔入るはあま徳由
庭火細く焚やうるかな
まらふも雲や月も星も
むふ鏡のしはく鏡行
年経ぬらぬはあまた
同進くはくあめかくま
芦垣入世とゆらも一き
中らせはくいふ青野の
し女子入むし思まき
記念のあふもあまけ
橋並く花入あま
佛入りきせえり人

二月入はは月の霞に

あま草まきくあまゆ
女花野のあま果まき
しりまあいのあまま
津とあまあまあま
庭まきくあまあま
病人もあまあま
あま向くはは理むる
松まきくあまあま
うけまきくあまあま
思まきくあまあま
くまきくあまあま
あまあまあまあま
あまあまあまあま

角をまわるとなるうら入端よ
竹の子よまほしのあま
西田入御首にほちもやう
中うら入龍入御首
向うらの神子の駿ふいせ
世川よ入行幸りあら
何とゆゑ花も同るそのま
葉しとあまのいぬ鳥入啼

第九

雪

何船

松を

末葉入るまきあま雪
鷺入るまきあま雪
名にほけ回の千もあま
まはるまきあま雪
堀りまきあま雪
花はまきあま雪
花はまきあま雪
花はまきあま雪

わんげんの余は清く
鷹を留ふといふくちく
人さるるを其のさるる
折しもやしく折入る
家も人もさるるを
あはれはる神のま
顔もさるるを
とさるるを
まもるるを
やもるるを
しもるるを
とらるるを
植るるを
行いふるを

乃佛はまむせとて頼は
連入るるを
夕ほのまむせとて
六田入るるを
水分のこぼるるを
うさるるを
こ人のまむせとて
高麗海に
けり入るるを
ね思ふるを
神さるるを
まもるるを
乃も月も
おのまむせとて

けつぎん木草の埋め
 けつぎん木草の埋め
 黙の母ふくすの道入末
 々々々々々々々々々々々
 煤さねて善にも言ふは
 去のひくふふいれ血入洞
 親らくる中へ跡を汗増
 けりふもらやる佐野の舟橋
 女むの信や松原と鶴あは
 柵とるまは凡らそをけり
 糸遊ふえの氣さうけられ
 月を夕まをのろけ雲
 久早もせまきさうせうら
 けりとつりかへりかほき

神由ぬの田草も木の花
 木花とけりまの麻くま
 木の社草いへもさうけり
 車への撒道にけり終ふ
 湯いそら水にも熱さうけり
 栗田の浦入のふの世ら
 川とそけりまをれ乱さ
 板のふささかまきり短さ
 松野向まけりまを短さ
 ちうけり行路の月けり
 着あまきりまの共破さ
 他目とまのへ海路まけり
 舟いけりまをぬを麻さ
 曾あまきりまをぬを麻さ

益部入夏の岡もさし物候
 終ハもえ入家くつか甲
 鳴虫を雨とせしむる
 峰も赤野の月夜露也
 秋と心庵の鳥籠は
 多にまじくふもるまじく
 中木のち葉もあつた
 けふもはくは法を
 多つて入るるの
 意乳根とらさき
 膏の岡もさし
 空名入るるは悔し
 寂しきもさし
 如海あつきの神を

去深き所垣あつり
 秋あつにも
 赤早入るる
 空あつても
 霜根と今
 雲を越り足
 けふもあつ
 空あつても
 月にある
 夕葉の花
 花とや
 集ひよ
 けふも

芳草ははらの花意は
きこえ女の青はまゝ
秋うらみも化さず
月とわがよの好き
秋の野とわが
便と法も雲の草
風まじはぬ
ゆきを

子十

雪

何

白を

はく雪
と余は
一花
雪
浪
戸
ふ

久もきくしふりしき
あくと伐るごとくは
之續く松葉の園の深き
夢の雲入るつむし
海の中を流るる水も
日ととも方なきに
之今日も待たぬ
裾野にもくは初凡
鳥の葉にまよふ
妹、よふととて
其もいりし
涙の雲はほ
之いそと花の
昔のそまよる。後入

凡のきくしふりしき
いりしき
老のきくしふりしき
つゝいりしき
道もきくしふりしき
いりしき
其もきくしふりしき
よもきくしふりしき
ふもきくしふりしき
かもきくしふりしき
暮のきくしふりしき
詠もきくしふりしき
ちもきくしふりしき
あもきくしふりしき

いひかゝるのまゝにゆゑに理
無きも人をもつては
まはれ給ふにきつる命
いふにきつる命
かほせらるる命
かほせらるる命
かほせらるる命
かほせらるる命
かほせらるる命
かほせらるる命

中村俊定文庫

水

本喜もと徳文庫(他石印)
水口豊次郎翁水口
予に與へし小たよりのなり

逸世俊定

水

